

国語辞典の土木

国文学アナリスト
大石久和
Hisakazu Obishi

何でも「土木作業員」だった時代

かなり昔のことになるが、何か事件があると「犯人の土木作業員は…」という報道が頻繁になされた時代があった。あまりの多さに、本当にその人が土木に従事していた作業員なのか確証を取って報道しているのかと不満に思ったものだった。

デスクではなく作業で働いている人が広範な職業分野にたくさんいるのに、犯罪があると決まって土木作業員というのは、実態を反映していないに違いないし、土木をおとしめるものだと考えていた。建設系の企業や業界団体などの動きもあったのか、最近は何でもかんでも土木作業員という表現はずいぶん控えめになったと感じている。

このいつも事件があると犯人は土木作業員とされた時代に、一般の人々は土木をどう捉え、どのように理解しているのかを知りたくなり、当時流通していた国語辞典に土木をどう説明されているのかと調べてみたことがある。

われわれ土木人は国語辞典で「土木」を引いたりはないが、土木作業員報道にふれた人や、これから大学でどのコースを選択しようかと考

えている高校生、自分の適性と将来の職業を考え始めた中学生などは国語辞典を引くかもしれない。その辞典での定義はどうなっているのかと調べてみると、これが驚天動地級の驚きだったのである。

最近、土木学会では「土木広報アクションプラン」をまとめたが、その作業のなかで、現在市販されている国語辞典が土木をどのように説明しているかを改めて調べてみた。

日本国語大辞典（小学館）

①土と木。比喩的に、飾らない粗野で素朴なものという。

②木材、鉄材、土石などを使ってする建物、道路河川、港湾などの工事。土木工事。

広辞林（三省堂）

家屋・灯台・堤防・道路・鉄道・橋・トンネル・運河などすべて木材・鉄材・土石などを使用して構成する工事。

粗野で素朴なものを「土木」と表現することがあるだろうか。なぜ、両辞典とも、土木が使用する材料から規定されると考えるのだろうか。

道路・河川・港湾・運河などと事業を説明もなく羅列して例示するが、これらに共通する特徴は一体何なのだろう。

われわれ土木人から見ると疑問だらけの説明なのだが、土木を専攻しようとする決断をする前の人々は、この説明に触れて土木を知ることになるということを土木側の人間はよく理解しておかなければならないのだ。

本当の実態はかなり酷いのだが、「辞典のなかの辞典」だと自他ともに認める感のある広辞苑はどう説明しているのだろうか。

広辞苑（第六版）（岩波書店）

土木工学、また、土木工事の略。

土木工学

工学の一部門。道路・河川・鉄道・橋梁・上下水道・発電水力・灯台・港湾・都市計画・環境計画・景観などの施設に関する歴史・理論および実態を研究する学問。

土木工事

道路・堤防・橋梁・港湾・鉄道・上下水道・河川など、すべて木材・鉄材・土石・コンクリートなど使用する工事。

土木工学を項目立てして説明しているのは評

価できる。ところが他の辞典と同じく事業の羅列はあるのだが、土木が実現しようとしている「インフラストラクチャーの構築」がまったく見えてこない。道路・河川などを列挙している項目の共通項は一体何なのか。工場や物流施設、倉庫などもこの並びなら入っけてもおかしくない感じなのだが、それらはなぜ入らないのか。それらは利潤動機で提供される材料やサービスなのだが、道路から河川に至る広辞苑などが例示し列挙しているものは、利潤動機ではまず提供されることがなく、公共が公共の力で公共のために提供するサービス、つまり社会を下から支えるインフラストラクチャー（＝社会資本）の個別事例なのである。

その説明をしないまま、道路などを羅列するだけでは、「土木の本質」は伝わらない。この国には、西欧にはあるインフラストラクチャー概念が欠落していることは再三指摘しているが、このような辞典の存在も日本人のインフラ認識の欠落を助長している。

使用する材料が土木を規定するのか

国語辞典がどれも皆共通して、使用する材料を丁寧列挙しているのも奇妙な話だ。辞典編纂者は使う材料が土木か否かを規定すると考え

ているのだろうか。木や鉄、土石を使うから土木なのではない。材料が何であれ、人々の生活を安全にし、効率的なものに変え、快適に暮らせるようにする社会の基礎構造建設は、すべて土木なのだ。

この定義では、首都高速道路などの橋脚の耐震補強に炭素ファイバーを使用したのが、その瞬間これは土木ではないなどといった馬鹿げたことが起きてしまう。これを考えるだけでも、使用する材料を列挙することなど、およそ無意味だとわかる。

われわれ土木人はこの状態を長く放置して、土木への理解が進まないなどと嘆いてきた。いま土木学会では、国語辞典に向けた土木の説明を研究している。これからの議論の結果を待つ必要があるが、小学生低学年用に次のような説明はどうだろうか。

「暮らしを自然災害から安全に守ったり、毎日の生活が便利になったりする施設を、みんなが力を合わせみんなのために造り上げること。堤防や道路は身近な一例である」

われわれ土木人自身が批判に耐える土木の定義や説明を考え、世に問わなければならない。こうした行動への努力が土木を磨き、土木の意味への理解につながるのである。